

空白と麻痺

－ James Joyce の “A Little Cloud” (*Dubliners*) への考察 －

梅 津 義 宣*

Emptiness and Paralysis ; An Analytical Approach to James Joyce's
“A Little Cloud” (*Dubliners*)

Yoshinobu Umetsu

Abstract

“A Little Cloud” (*Dubliners*) goes on to portray the kind of conjugal frustration. Little Chandler is a diminutive figure who gives one the idea of being a ‘little man’, playing the role of henpecked husband to an aggressive and domineering spouse. He envies the escape and freedom of his old friend Ignatius Gallaher who serves as the imaginary alter ego. The aim of this paper is to analyze the universal consciousness of ‘emptiness’ and ‘paralysis’ in this story.

Key Words

emptiness, escape, melancholy, paralysis

はじめに

“A Little Cloud” は、James Joyce (1882-1941) によって書かれた短編集 *Dubliners* (1914年出版) の第8番目に置かれ、全15篇の短編小説の中ではほぼ中央に位置する作品である。“A Little Cloud” は、通常 Joyce 研究家によって本短編集 *Dubliners* が区分されるグループの中で第3群(壮年期・成熟期)に相当する作品で、作者 Joyce 自身、弟 Stanislaus に宛てた書簡(1906年6月10日付)の中で、「“A Little Cloud” は私のどの詩よりも歎びを与えてくれる作品である」¹と述べている。ここで、Joyce は散文作品である本短篇物語を「詩」(verse)と呼び、その時期に未だ充分にその真価が認められていなかった前期(第1期:少年期～第2期:青年期)の諸作品にもまして、詩的な響き、モチーフの鮮明さ、作品構築上の周到な巧緻さをもって書き上げたという達成感・満足感を率直に吐露している。

Joyce は、*Dubliners* 全篇をとおして、生と死、愛と憎しみ、貧困と富裕、優越心理と劣等意識、頑強と卑小(脆弱)、都会と田舎、宗教、民族、家族(家庭)など、あらゆる人間存在の根本問題を取り扱いながら、そのすべてを、究極的には「精神的麻痺」(spiritual paralysis)に収斂している。ダブリンの市民を見詰める Joyce の視線は、終始、冷厳であり、客観的かつ写実的である。

本論文の目的は、この物語(“A Little Cloud”)の基盤を構築する「精神的麻痺」について

* 尚絅学院大学 教授

考察することである。とりわけ、人間が遍く抱き得る「小ささ」「脆弱さ」の意識は空白（空虚）や憂鬱など多様な心理的要因と相互的につながって、精神的な麻痺状態を起し得る。主人公は常に「小ささ」「脆弱さ」を実感している。この物語には、このことを実感させる二重の構造がある。第1は、主人公がロンドンで活躍する旧友に出会うことが契機となって、単純な居住空間（大都市と地方都市）の「大」「小」の格差の意識が主人公の羨望を掻き立て、ひいては住み慣れたダブリンからロンドンへの「脱出」の意欲を湧き立たせる。第2は、主人公の家庭（家族）の現状である。妻にも赤子にも徹底的に束縛され追い詰められる主人公の状況を分析しながら「脱出」のモチーフについて考察したい。さらに、この考察で重点を置きたいことは「文体的特徴」である。とりわけ「語りの文体」に注目しながらこの物語の文学的特性の核心に迫ることを目標としたい。同時に、作者 Joyce が、この物語の中で、読者を観客として構築する「ドラマ的特性」（とりわけ「喜劇的特性」）についても考察したいと考えている。主人公の言語表現はもちろん、彼を取り巻く登場人物の「語り」に留意したい。とりわけ、故郷ダブリンを脱出して大都市ロンドンやパリで活躍し、ダブリンに一時帰郷して語る副主人公の言語表現（特に「語りの文体」）に注目し、文学的に考察することは、この物語のモチーフの核心に迫る重要な接近法である。

I. 主人公 Little Chandler の内面を襲う「穏やかな憂鬱」

（ロンドンと比べれば）小さな地方都市ダブリンで小心翼翼とした生活を余儀なくされる主人公 Little Chandler は国王法学院（the King's Inns）で書記を勤める。どちらかと言えば臆病で繊細な性格の持ち主である。将来、詩人になることを夢見ながら、たまには陰鬱な響きの詩を作ることを楽しみにして生きている。彼は、偶然の成り行きで、ダブリンを脱出して大都市ロンドンやパリのジャーナリズムの世界で活躍する旧友 Ignatius Gallaheer と会うことになる。

物語“A Little Cloud”の書き出しは、James Joyce の典型的な手法（リアルな場面描写と主要な登場人物の紹介）によって次のようになされる。

- (1) Eight years before he had seen his friend off at the North Wall and wished him god speed. Gallaheer had got on. You could tell that at once by his travelled air, his well-cut tweed suit, and fearless accent. (p. 84)

まず、「8年前」と具体的に時間が言及される。この物語の場面が1903年ごろに設定されていることから計算すれば、この「8年前」は「1895年ごろ」と考えられる（執筆時期は1906年初頭）。「ノース・ウォール（North Wall）」はアイルランドの人々が外国に旅立つときに出港する主要な港である。物語の主人公 Little Chandler の目前に8年ぶりで登場する Ignatius Gallaheer は、故郷に居残った主人公の目から見れば、旅慣れた「成功者」である。Gallaheer によって示される服装、物腰、口調などは「成功者」の名に相応しい様相を示し、それが密かに蠢く Chandler の感動と羨望を呼び覚ます。友人 Gallaheer は、「麻痺的症狀」の進行するダブリンを脱出し、世界への旅に出た。それに比べ Little Chandler は故郷離脱を決断することも行動に移すこともできなかった。このことへの無念と後悔と慙愧の入り混じった惨めな感情が Chandler の内面で再燃し始める。

続くパラグラフでは、Little Chandler の名前がその冒頭に置かれ、とりわけ「小ささ」の概念が明確にされる。

- (2) Little Chandler's thoughts ever since lunch-time had been of his meeting with Gallaher, of Gallaher's invitation and of the great city London where Gallaher lived. He was called Little Chandler because, though he was but slightly under the average stature, he gave one the idea of being a little man. His hands were white and small, his frame was fragile, his voice was quiet and his manners were refined. He took the greatest care of his silken hair and moustache and used perfume discreetly on his handkerchief. The half-moons of his nails were perfect and when he smiled you caught a glimpse of a row of childish white teeth.

(下線筆者) (p. 84)

昼食を食べている時から、主人公 Little Chandler の脳裏には Ignatius Gallaher からの招待、彼との再会、大都市ロンドンのことなどが次々と浮かび上がってくる。彼は、平常、「身長が平均よりも少し低い」というだけで「小さい男」という感じを周囲に与えるので“Little Chandler”と呼ばれているが、作者 James Joyce の主要な意図は、「主人公の容姿のサイズが小さいこと」「彼が小男であること」のイメージを読者に印象づけることではない。むしろ、作者の意図は、(これはこの物語のモチーフを的確に読み取ることと密接な関わりをもつことになるのだが)、主人公の「こころの細やかさ」「こころの小ささ」「小心」、ひいては「幼稚な精神的生活」などのイメージを読者に付与することにあると考えることができる。これを証左するように、上記引用文(2)の後半には「手は白く、小さい」「声は静かで優しい」「物腰が上品である」「柔らかな金髪と口髭を念入りに手入れし、ハンカチには香水を控えめにつける」などと描写される。

“Chandler”は「ろうそく師」(candle-maker)を意味する²。主人公 Chandler は、Joyce の作品にしばしば登場する「ろうそくの光」のイメージを身に帯びる人物の一人である。どちらかと言えば、Joyce の文学世界は「真っ暗闇」ではなく「薄暮にも似た微かな闇」である。Chandler は、その「微かな闇」の中で仄かな灯火をともし役割を担う人間存在として登場している。これに“little”という愛称が付加されるとき、彼は「微かな光」をもたらし人物を読者に想起させる。上記引用文(2)のパラグラフは、「主人公が笑うと、子どものような白い歯並がちらりと覗く」という表現で終わる。

ここでは、「小ささ」に「子どもっぽさ」のイメージが添加され、Joyce の描くダブリン市民の特質である「精神的未熟さ」が象徴的に映し出されている。

「この8年の歳月」がもたらした大きな変遷・変化に Chandler は思いを馳せる。彼は、国王法学院の法律事務所の一隅に割り当てられた机に向かいながら、過去と現在を見比べ、同窓の Gallaher と自分を比較してみる。過去の「貧乏な風采で、自分よりも出来の悪かったあの友 Gallaher」が、今や、ロンドンの新聞界で花形になっている。「旧友の輝き」と「小さなろうそく」との対比がことばの中に映像化される。晩秋の夕陽の輝きの中で「金切り声をあげて砂利道を走る子どもたちの姿」を追う Chandler の視線は、やがて、この物語の最後の場面で彼自身の子ども(赤子)が泣き叫ぶ姿と重ねて読む読者の視線と交叉する。

「人生」を想うとき、Little Chandler は「穏やかな憂鬱」(gentle melancholy)にこころを

捉えられる。……自宅の書棚に置いてある詩集。それは彼が独身の頃に買い求めたもので、その頃は美しい詩の世界に浸ることもあった。今は結婚している。ときどき妻になにか朗読してやりたいという誘惑に駆られることもあるが、「気恥ずかしさ」と「小心」がそれを思い止まらせる。「独りで」詩を口ずさみ、自分を慰めている。

ようやく（終業の）鐘の音が時を告げると、Chandler が国王法学院の中世（封建時代）の漂いを感じさせるアーチ形の門の下から姿を現す。ここでは、＜法律事務所での「退屈な仕事」縛られた囚われの身からの解放の姿＞と、＜大英帝国の抑圧を象徴する国王法学院を抜け出す姿＞が重なり合って映像化されている。彼には、たとえ瞬時ではあっても、「脱出・解放」への意図は確実にあることが暗示される。彼の歩調はとても速い。“walk swiftly” という表現がここで三度も繰り返され、期待と焦燥が入り混じった彼の内面的様相が強調される。帰郷した旧友 Gallaher によって彼は初めて高級料理店（Corless's）に招かれ、歓喜でところが満たされ、思わず歩調が速くなる。これまで「わざと見ないようにして通った未知の世界」に向かう不安や恐怖にも戦慄しながら、歩調をいっそう速めてゆく。ダブリンの街の中を足早に通り過ぎてゆく Chandler の複雑な思いは、作者 Joyce が熟知しているダブリンの現実の街路名の巧妙な駆使を基盤にしなが、さらに奇妙な浮遊を示す。

- (3) The glow of a late autumn sunset covered the grass plots and walks. It cast a shower of kindly golden dust on the untidy nurses and decrepit old men who drowsed on the benches ; it flickered upon all the moving figures — on the children who ran screaming along the gravel paths and on everyone who passed through the gardens. He watched the scene and thought of life ; and (as always happened when he thought of life) he became sad. A gentle melancholy took possession of him. He felt how useless it was to struggle against fortune, this being the burden of wisdom which the ages had bequeathed to him.

（下線筆者）（p. 85）

晩秋の黄金色の夕陽の輝きが芝生や歩道を包む。夕陽はベンチで居眠りをしているだらしない乳母たちにも、よぼよぼの老齢者たちにも、金切り声を上げながら無邪気に砂利道を走り回る子どもたちの上にも、快い金色の粉を降り注ぎ、生きとし生けるものの上で揺らめいている。夕陽の力が、ダブリンの「麻痺」の表象の一面である「乱雑・老齢・疲弊」の様相と、無邪気に動き回る子どもたちの「活発さ」と混交させ、融合させる。Chandler はこの情景を眺めて「人生」について思いを馳せる。悲哀とともに穏やかな憂鬱（gentle melancholy）が彼のところを圧縮する。人生に逆らうことの無益さを痛感する。この感覚こそ年齢が彼に授けた知恵であり、同時に重荷でもある。

生まれてはじめて、Chandler は、何でもない行きずりの老若男女に名状しがたい優越感を覚えながら、「成功しようと思えば外に出ることだ」と囁く。優雅さを欠くダブリンを離れ、憧れの大都市ロンドン、自由と刺激に溢れたロンドンに惹きつけられてゆく。彼は今32歳。この年齢を思えば、「ロンドンへの逃亡の望みは決して子どもっぽい望み（infant hope）ではない」という確信が湧き上がってくる。

II. 「在郷者」 Little Chandler と「帰郷者」 Ignatius Gallaher

“A Little Cloud” は、8年ぶりにロンドンからダブリンに一時帰郷し都会生活を誇張して語る新聞記者の副主人公 Ignatius Gallaher と故郷ダブリンに残留し相手から一方的に自慢話を聞かされる主人公 Little Chandler の関わりを保ちながら展開する。酒豪の Gallaher は、下戸同然の Chandler を高級酒場に連れ出し、ロンドンでの実生活やパリで見た煌びやかな様子を脚色して語り、まるで威圧するような口調で愚直な在郷者を驚かせ、羨ましく思わせては悦に入っている。

この物語においては、「帰郷者」と「在郷者」、「放言するもの」と「故郷に残った寡黙で愚直な青年」というドラマとしての特徴的要因が見られる。あらゆる面で対照的な個性をもつ主人公と副主人公という構図である。ここで読者が読む文学世界には、読者を観客とする作為的な文体や語りが用いられることに注目したい。³ この対比的な描写は、量的には、この物語のおよそ半分を占め、多弁な Gallaher が尊大な態度で目立たない気弱な Chandler と自らの故郷ダブリンをく支配する場面を構築している。

話の中身はもちろんのこと Gallaher の身のこなし（服装、話し振り、細かい仕草など）自体、Chandler 自身の置かれている状況とは好対照を成す。Chandler は、「小心さ」故に自らに招いた結果だと考える。

主人公 Little Chandler は 32 歳。自分の気質はちょうど成熟の時点に在るという（思い上がりにも似た）自覚を感じている。このような Chandler が旧友 Gallaher に再会場所に指定された高級酒場に入ってゆく場面は次のように描写される。

(4) The light and noise of the bar held him at the doorways for a few moments. He looked about him, but his sight was confused by the shining of many red and green wine-glasses. The bar seemed to him to be full of people and he felt that people observing him curiously.

(p. 89)

酒に弱い主人公 Little Chandler がこれまでに足を踏み入れたことのない世界が描き出される。彼の足を、暫時、酒場の戸口に引き止めたのは、まず、眩い光と騒音である。それに、赤や緑のワイングラスの輝き。酒場の席を満たしている客たちの視線も気になる。過剰なほどの当惑と緊張と怯えが写実的な文体によって効果的に伝えられる。

長い空白の末の再会にしては、帰郷者 Ignatius Gallaher の態度は在郷者 Little Chandler に対して余りにも馴れ馴れしく、傲慢で、横柄である。在郷者が、再開中、相手に対して一貫して“you”を用いるのに対して、帰郷者 Gallaher は、再会の直後から、Chandler に対して“Tommy”とか“old hero”、さらには“old chap”や“old man”、“my boy”という呼び方をする。「相手が普段はほとんど酒を飲まない下戸である」という弱点を確認するや否や、今度は、卑劣にも、（昔、共通の友達であったと思われる女性）O’Hara のことを言いがかりにして、相手（Chandler）の（性に関わる）道徳性・倫理性を探り始めるようなことまでする。

「高慢かつ横柄な Gallaher」と「謙遜で生真面目な Chandler」というく鮮明な輪郭をもって対比する構造が描き出される。虚実取り混ぜながら、自らの都会生活を誇大な表現様式で相手に叩き込む Gallaher。酒の飲み方まで対照的である。高級ウイスキーをストレートで豪快に

一気に飲み干す (Gallaher の) 様子は “boldly” と表され、「普段はめったに飲まないよ」と遠慮がちに言う Chandler の様子は “modestly” と描かれる。この “modestly” と “boldly” の対比には、両者の酒への姿勢だけではなく、人間性の明確な差異・対比を感じさせる。酒場で両者が繰り広げる一連の対話 (言語表現) の様式や話題の中身、物腰などにおける極簡単な差異はこの物語に顕著な喜劇的特性を付与している。

帰郷者 Ignatius Gallaher の大言壮語の信憑性は怪しげであり信じがたい。しかし、在郷者 Little Chandler は大風呂敷ともいえる幼馴染の経験談に疑問を挟むことなく素直に受け入れる。彼は Gallaher の法螺話を額面どおり無邪気に受け入れる「優柔で曖昧な寛容さ (他者受容)」もさることながら、真実を言えば、旧友が故郷を脱出して手に入れた「好機」そのものが自分のところを虜にし、魅了しているのである。旧友が収めた「好機」自体に対して素朴な畏敬の念を抱く。そのような「無邪気さ」「素朴さ」「曖昧さ」「優柔な態度」などは彼の「小ささ」を表している。それにしても、ロンドンやパリの大都市の名が次々と口に出される会話は、二人の言語表現の極端な違いを提示しながら「喜劇的ドラマ性」を付与する。

(5) Little Chandler took four or five sips from his glass.

‘Tell me,’ he said, ‘is it true that Paris is so . . . immoral as they say?’

Ignatius Gallaher made a catholic gesture with his right arm.

‘Every place is immoral,’ he said. ‘Of course you do find spicy bits in Paris. Go to one of the students’ balls, for instance. That’s lively, if you like, when the *cocottes* begin to let themselves loose. You know what they are, I suppose?’

‘I’ve heard of them,’ said Little Chandler.

(p. 93)

在郷者 Little Chandler は派手なオレンジ色のネクタイを結んだ Ignatius Gallaher の誇張に満ちた体験談に圧倒され、黙々と聞き耳を立てるか、たまに羨望の念を込めてヨーロッパ諸国のことを短く質問するか相手の語調の荒い一方的な質問に相槌を打つしか他に手はない。帰郷者 Gallaher の言い回しは、これとは対照的に、矢継ぎ早で、しかも、ジャーナリズムの世界で用いられる専門用語を一般語のように対話の中に挿入する。一貫性を欠いた無秩序な言葉遣いが目につく。これは明らかに自分の仕事を鼻にかけるものである。一方、巷で交わされる陳腐で品の悪い (俗語・方言・転用語などの) 言語表現も数多く目に留まる。

Gallaher の「品格を低めると思われる言語表現」は枚挙に遑がない。煩を避けて特徴的な用例を抜粋し以下に示すこととする。

- ① I feel a ton better since I landed again in dear dirty Dublin . . . (p. 90) ② I’ve been to all the Bohemian cafés. Hot stuff! Not for a pious chap like you, Tommy. (p. 92) ③ I say, Tommy, don’t make punch of that whisky : liquor up. (p. 93) ④ Next year if I come, parole d’honneur. (p. 96) ⑤ Very well, then, . . . let us have another one as a deoc an doruis. (p. 96) ⑥ I’m going to have my fling first and see a bit of life and the world before I put my head in the sack . . . if I ever do. (p. 98)

上記引用文は全て Little Chandler を相手に語られた Ignatius Gallaher の語りの例である。

① ‘a ton’ は【colloquial use】で “a very large amount” の意味 (OED)。② ‘Hot stuff!’ も【colloquial use】で “something or someone that is very exciting, interesting, etc.” (Longman)。③ ‘liquor up’ は【slang】で “(cause to) drink large amount of alcoholic liquor” (COD)。④ は【French】で「名誉をかけた約束」の意。⑤は【Irish English】で “a door-drink” (別れのための一杯：最後の一杯) のこと。⑥は「(結婚という) のっぴきならない羽目に陥る」の意図だろうが、この表現は (いかなる権威ある辞書にも) 正当な英語表現としては認められていない。おそらく作者は “put one’s neck in (into) a noose” (The Kenkyusha’s Dictionary of English Collocations) からの巧妙な転用を行ったとも考えられる。

Ⅲ. 夫・父親である Little Chandler

Joyce 特有の時間的・空間的省略が用いられ、いきなり、物語の後半の場面 (第3の場面) に移る。物語の後半は、主人公 Little Chandler の家庭内の場面である。旧友 Ignatius Gallaher からその開放的で奔放な暮らしぶりを誇示されたこともあって、彼は自分の家庭の閉鎖的な現状を気づかせられる。ここでの主人公と他者との関係は、妻 Annie と言葉を二言三言交わすのと赤子の子守をするぐらいである。他人に子守を託するだけの経済的余裕がない。物語の後半場面全体は暗い内容であるが、一語一句を押さえながら丁寧にリアリズムの立場に立って読むならば、ユーモラスな場面にも思われてくる。一般的に言えることであるが、読者本人にとっては真面目で深刻な内容・場面であったとしても、対象から客観的に一定の距離を置き、喜劇的な見地や視点に立って読めば、登場人物の大袈裟で破廉恥な振舞いや悲哀を誘うような場面が滑稽に映ることもある。物語 “A Little Cloud” のこの場面は「悲哀は滑稽の裏返しである」ことを読者に痛感させる。

Chandler の妻は紅茶と砂糖を近くの乾物屋で買いに外出し留守である。彼は赤子の子守をさせられている。ランプの光が映し出す妻の写真に目を止めた Chandler はかつて自分が贈った「水色のブラウス」を着ている妻の姿から、二人の苦々しい夫婦関係に思いを廻らす。... 「水色のブラウス」を買うため、自分がひどく気を遣い、また店で恥ずかしい思いをしたこと、ブラウスを家に持ち帰ると妻は喜びのあまり彼に接吻までしたこと、しかし値段を聞いたとたん彼を非難したこと、その後実際に着てみて気に入り喜んだものの、結局は彼の好意を充分には認めてくれなかったことなどを苦々しく思い出す。

- (6) When he brought the blouse home Annie kissed him and said it was very pretty and stylish ; but when she heard the price she threw the blouse on the table and said it was a regular swindle to charge ten and elevenpence for it. At first she wanted to take it back but when she tried it on she was delighted with it, especially with the make of the sleeves, and kissed him and said he was very good to think her.

Hm ! . . .

(p. 100)

妻 Annie に対する Chandler の不満を Joyce は冗長に書き連ねた後、一言 “Hm ! ...” で終止符

を打つ。【Hm,そして間投詞、次に省略記号】。AnnieとChandlerの気質の「対照」を強烈に示す巧みな言語表現である。妻への不満の思いが「言葉で表し切れない内面の不明瞭さ・曖昧さ」の残響となっている。このような意図的な対照の技法は、この物語に喜劇的な特性を付与していると考えられることができる。

旧友Ignatius Gallaherへの飽くなき羨望と自己憐憫が妻への不条理な腹立たしさを喚起し増幅させる。Chandlerにとっては、家庭は「結婚という牢獄」(the prison-house of his marriage)⁴でしかない。しかし、妻が選んだ「美しい家具」にも「どこか卑しいもの」「嫌悪感」を感じるというChandlerの内面にこそ人間としての根源的問題を窺う。自らの人生への鈍い憤りや現実の生活への嫌悪感や不満が意識の中に戻ってくると、Chandlerは「家庭からの脱出」「ロンドンへの脱出」を考える。

(7) Could he not escape from his little house ? Was it too late for him to try to live bravely like Gallaher ? Could he go to London ?

(p. 101)

空想に耽るうち、赤子が目を覚まし泣き始める。Chandlerが宥めようとしてもひどくなるばかりである。泣き喚く赤子を両腕に抱え、強く揺るのが精一杯。そのような状態でByronの詩の第2連を読もうとする。赤子は前よりも一層大声で泣き叫ぶ。「黙れ！」(“Stop !”)と彼は赤子に向かって怒鳴る。ますます泣き声は大きくなるばかりである。皮肉なことに、ここはLittle Chandlerの「小ささ」、つまり彼の「精神的な小ささ」、「父親としての度量の欠如」、ひいては「無気力」や「麻痺」にも繋がる状況を露呈する場面となる。

やがて妻Annieが戻ってきて夫の空しい努力を詰り、ついには彼を押しつける。恥辱と無念の思いで見守る中、妻は夫に代わって赤子をあやし、優しく次のように呼びかける。

(8) ‘My little man ! My little mannie ! Was ‘ou frightened, love ? . . . There now, love ! There now ! . . . Lambabaun ! Mamma’s little lamb of the world ! . . . There now !’

(p. 103)

赤子をあやす際に、寸時に出たこの表現は、/m/と/l/音の頭韻と“*There now !*”を反復させ、律動的な心地良さを感じさせる。また、“*Lambabaun*”はアイルランドの方言で“*lamb-baby*”の意であり、“*Mamma’s little lamb of the world !*”の“*lamb*”は愛情深さを表す語りかけの言葉で、「子羊のようにおとなしくてかわいい子ども」の意。“*the Lamb of God*”の表現は「神の子羊」を暗示している。詩的ニュアンスを漂わせる言葉で、主人公の妻はだれよりもわが子が大事とばかり甘美な声であやし、夫に対してあてつけている。この物語前部には、Chandlerが自らの詩的才能を自負する件が暗示されているが、この部分では逆転し、却って妻Annieの方に詩的才能が豊かにあることが示され、このことは、(Chandlerにとっては)きわめて皮肉な場面となる。彼の文学的創造力は、所詮、死に絶えた言葉や過去のイメージの物真似に過ぎないものであり、限界に来ていると物語の語り手は各所で(微かに)仄めかしている。

物語の最後では、主人公Little Chandlerは「日常生活より詩作を！」と意気込んだ以前の活力を失ってしまい、赤子の安否を気遣い、妻に隠れて独り涙する。

- (9) Little Chandler felt his cheeks suffused with shame and he stood back out of lamplight. He listened while the paroxysm of the child's sobbing grew less and less ; and tears of remorse started to his eyes.

(p. 103)

赤子の泣き声が鎮まってゆくのを聞きながら、Little Chandlerは目に「痛恨の涙」(tears of remorse)を浮かべ、物語は幕を閉じる。物語の終焉となるこの「涙」は、直接には、号泣する赤子を宥めることのできない「不甲斐なさ」「無力さ」を恥じ入ることからくるものであろう。また、父親としての自覚の欠如を悔やむ苦々しい自己認識に起因するものでもあるだろう。さらには、自らの「不毛の人生」に対する悔恨の涙とも考えられる。この場面で彼の涙を旧友 Ignatius Gallaher への悔し涙と解釈するのは短絡的ではなからうか。このように複雑な余韻を残す「物語の結末」を構築するために、簡潔な時の流れの中で、主人公 Little Chandler の人物像は作者 Joyce によって巧妙かつ綿密に映し出されてゆく。茫漠とではあるが、主人公が態度を改め、妻と子供とともに愛情の籠もった確かな家族を構築したいとの思いも読み取ることができる。そのような思いを含めた「自己憐憫の涙」と読み取ることも不可能ではない。

おわりに —— 「麻痺」からの脱出の可能性を想わせる「小さな雲」 ——

物語の副主人公 Ignatius Gallaher はダブリンからの脱出者であるが、どうも、彼の人物像の輪郭が、終始、鮮明に見えてこない。(彼の自称する「ロンドンの新聞界の大物」というのも胡散臭い；果たしてそのような優れた才覚が以前からあったのかは疑問である。)ただ、この物語は「彼の虚勢や誇大な自己過信の様相」と「小心翼翼として故郷ダブリンに残って生きる Little Chandler の素朴さや愚直さ」とのコントラストという単純な構図を取り入れていることは確かである。その単純な対比によってこそこの物語のモチーフや真髓のようなものが高い鮮度を保ちながら読者の内的世界に浸透してくると確信しながら読んでゆくと、ますます作者 Joyce の術中にはまることになる。

主人公 Little Chandler は旧友 Gallaher に対して抱く「羨望の意識」、「距離感」、「空白感」、「虚無感」、「憂鬱な情感」などは、ひいてはダブリン市民の普遍的病相である「精神的麻痺」(spiritual paralysis)へと繋がってゆく。「精神的麻痺」には、単なる麻痺のほかに無気力、無価値、死などの諸概念・様相が含まれる。当時のダブリン市民生活は空虚と欺瞞に充ち、そのため志のある市民はそこからの脱出を夢想するが、内外の錯綜した事情によって、結局は挫折してしまう。作者 Joyce は、19世紀末から20世紀初頭のダブリンに住む下層中産階級に属する人々の日常茶飯事を細密に観察し、それを《言葉》によつて的確に模写している。現実の人々や光景を「あるがままに」表現するリアリズムの手法は、Joyce 特有の皮肉、風刺、ユーモアをも生み出し、当然のことながら、それは喜劇的特性と連結する。またダブリンを如実に描くことは、精神的麻痺状態に陥ったダブリンの現実への「辛辣な批評」に他ならない。

本論文で考察してきた短篇“A Little Cloud”も「ダブリンの麻痺」の深刻な現状に警鐘を鳴らす作品の一つであり、同時に、国境を超えて全ての人間に遍く忍び寄り「麻痺状態」に陥らせる人間の本来の特性と人間社会の在りかたを問いかけている。

ところで、この物語が“A Little Cloud”と名づけられた根拠については、しばしば言及され、

論議されてきたが、この命名の主要な論拠を（Old Testament）*I. Kings* 18 : 44 に求めることは蓋し妥当であるだろう。⁵ — “Behold, there ariseth a little cloud out of the sea, like a man’s hand.”（The Authorized Version）—これは預言者 Elijah が異教の神 Baal の預言者を打ち破るくだりを述べた場面である。イスラエルの民を苦しめた長期にわたる旱魃を終わらせることで、Elijah は民に神の力を証明し、民の信仰を回復させた。雨の最初の兆候は「人の手ほどの小さな雲」である。この「小さな雲」が、Elijah の時代に、恵みの雨を降らせ、憂いや涙を洗い流したように、この物語の根底にも「麻痺に侵された 20 世紀初頭のダブリン」にも癒しと新鮮な活力とをもたらし「小さな兆し」への想いと希望が籠められている。主人公 Little Chandler の姿は空に浮かぶ「小さな雲」に似ている。いつも動揺し、彷徨い、流され、そして自らを覆い隠すことも多い。この物語の結末は、「麻痺からの解放」の多義的な余韻を醸し出しながら、この物語の文学的特性の純度を高めている。

【付記】

- テキストは Joyce, James. *Dubliners*. London : Grant Richards Ltd. Publishers. 1914 を使用した。

【注】

1. Ellmann, Richard ed. *Letters of James Joyce vol. II*. New York: Viking Press, 1966, p.182.
2. Jackson, John Wyse & Bernard McGinlei. *James Joyce’s Dubliners. An Anoted Edition*. London : Sinclair-Stevenson, 1993, p.62.
3. 米本義孝. 『言葉の芸術家ジェイムズ・ジョイス』東京：南雲堂. 2003, p.18.
4. Henke, Suzette A. *James Joyce and the Politics of Desire*. New York & London : Routledge, 1990, p.30.
5. 辻弘子. 『『ダブリン市民』と聖書のイメージ』東京：音羽書房鶴見書店. 2001, p.86.

【参考文献】

- Beck, Warren. *Joyce’s Dubliners.: Substance, Vision and Art*. Durham N. C. : Duke University Press, 1969.
- Black, Martha Fodaski. *Shaw and Joyce : “the last word in stotentelling.”* Gainesville : University Press of Florida, 1995.
- Ellmann, Richard. *James Joyce* (New & Revised Edition). Oxford : Oxford University Press, 1982.
- Fargnoli, A. Nikolas & Michel Patrick Gillespie. *James Joyce A to Z : The Essential Reference to the Life and Work*. The University of Washington Press, 1965.
- Foster, John Wilson. *Irish Novels 1890 – 1940 : New Bearings in Culture and Fiction*. New York : Oxford University Press, 2008.
- Ghiselin, Brester. “the Unity of Joyce’s *Dubliners*”, *The Twentieth Century Interpretations of Dubliners*. (Garette, Peter K. ed.) Englewood Cliffs N. J. : Prentice Hall Inc., 1968.
- Gifford, Don. *Joyce Annotated*. Berkley : University of California Press, 1982.
- Henke, Suzette A. *James Joyce and the Politics of Desire*. New York & London : Routledge, 1990.
- Herr, Cheryl. *Joyces Anatomy of Culture*. Illinois : University of Illinois Press, 1996.
- Mahaffey, Vicki. *Reauthorising Joyce*. Gainesville : University Press of Florida, 1995.
- Parrinder, Patrick. *James Joyce*. Cambridge : Cambridge University Press, 1984.
- Wales, Katie. *The Language of James Joyce*. London : Macmillan Education Ltd, 1992.